

---

# 老年病専門研修プログラム

---

---

総合大雄会病院

---

作成日  
2017/08/30

## 目次

1. 理念・使命・特性.....	3
2. 老年病専門研修はどのように行われるのか.....	3
3. 専攻医の到達目標(全プログラム共通).....	4
4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の修得.....	4
5. 学問的姿勢.....	5
6. 老年病専門医に必要な倫理性、社会性.....	5
7. 研修施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方.....	5
8. 年次毎の研修計画.....	6
9. 専門医研修の評価.....	6
10. 専門研修プログラム管理委員会.....	7
11. 専攻医の就業環境.....	7
12. 研修プログラムの改善方法.....	7
13. 修了判定(全プログラム共通).....	7
14. 専攻医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと(全プログラム共通).....	7
15. 研修プログラムの施設群.....	8
16. 専攻医の受け入れ数.....	8
17. 研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件.....	8
18. 専門研修指導医(全プログラム共通).....	8
19. 専門研修登録システム(全プログラム共通).....	8
20. 専攻医の採用方法.....	9

## 老年病専門研修プログラム

### 総合大雄会 病院老年病専門研修プログラム

#### 1. 理念・使命・特性

総合大雄会病院の基本理念に則り、思いやりの心を持って、患者さま・ご利用者さま中心の良質な医療・介護を提供できるよう、医療事情を理解し、地域の事情に合わせた実践的な医療も行えるよう訓練され、さらに高齢者の医療・介護・福祉にかかわる職種としての能力を修得する。

#### 2. 老年病専門研修はどのように行われるのか

- 1) 研修段階の定義：老年病専門研修は、内科を基本領域として、幅広い内科疾患の病態を理解し、基本的な治療法を修得したうえで、より高度な老年病の専門性を修得する。なお、老年病専門研修は内科専門研修と並行して行うことが可能である。
- 2) 専門研修の3年間(内科・老年病混合タイプの場合は4年間)は、日本老年医学会が定める「老年病専門医カリキュラム」(別添)に記載されている老年病専門医に求められる知識・技能の修得目標に対して、3年間の専門研修の終了時に達成度を評価する。具体的な評価方法は後の項目で示す。
- 3) 臨床現場での学習：老年病専門医カリキュラム必須項目すべてと、必須以外の項目の7割以上に関して研修レポートを記載することを要件とする。研修手帳への記載と指導医の評価・承認によって目標達成までの段階を明示する。研修施設ごとの到達目標は以下の基準を目安とする。

#### ● 基幹施設(総合大雄会病院)での研修期間

期間：原則として2-3年

経験：老年病専門医カリキュラムのうち、“1.高齢者の生活機能の評価と介入”と“2.高齢者の特性に基づいた慢性疾患の管理”、“3.高齢者の特性に基づいた急性期医療の実践”、“4.介護予防へのアプローチ”、“5.多職種連携におけるリーダーシップの発揮”、“6.地域包括ケア・在宅医療の実践/マネジメント”、“7.エンドオブライフケアの実践/マネジメント”を5割から7割以上の修得を目標とする。

#### ● 連携施設(急性期病院:名古屋大学医学部附属病院)での研修期間

期間：原則として1-2年間

老年病専門医カリキュラムのうち、“1.高齢者の生活機能の評価と介入”と“2.高齢者の特性に基づいた慢性疾患の管理”、“3.高齢者の特性に基づいた急性期医療の実

践”、“4.介護予防へのアプローチ”、“7.エンドオブライフケアの実践/マネジメント”も修得することが可能である。必須項目の全てと非必須項目の3-5割以上の修得を目標とする。

● 全期間を通じての研修

全期間を通じて、基幹施設の指導医との連絡を密にとり、教育活動(学生対象の講義、院内セミナーや市民対象の講演などを含む)を経験する。また、学術活動として、学会発表もしくは論文発表を少なくとも1件は達成し、老年病専門医カリキュラム“8.老年病学・老年医学研究と医療への応用”について経験できるようにする。

1) 臨床現場を離れた研修

日本老年医学会の学術集会や地方会において、多くの教育講演に参加し、それを聴講し、学習する。

2) 自己学習

日本老年医学会で作成している老年病専門医テキスト、ガイドラインを活用して、自主的に学習する。さらに、基幹施設中心とするカンファレンスや学術活動の機会を通して、学術論文による自己学習の習慣を身につける。

**3. 専攻医の到達目標(全プログラム共通)**

3年間(内科・老年病混合タイプの場合は4年間)の研修期間で、以下に示す項目を完了することとする。

- 1) 老年病専門医カリキュラムに示された必須項目すべてと、必須項目以外の項目の7割以上に関して修得したことが確認できること(研修レポートと面接)。
- 2) 研修の間に、何等かの教育活動(学生対象の講義、院内セミナーや市民対象の講演を含む)を経験すること。
- 3) 学術活動として、学会発表もしくは論文発表を少なくとも1件は達成させること。

**4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の修得**

1) カンファレンス・回診

基幹施設での研修中は、1日1回以上カンファレンス・回診を行い指導医からフィードバックを受け、指摘された課題について学習を進める。

2) 全体カンファレンス

基幹施設での研修中は、少なくとも週1回受持患者について、指導医に報告してフィードバックを受ける。また、受持以外の症例についても見識を深める。

### 3) 他科カンファレンス

基幹施設での研修中は、週2回他科へのカンファレンスに参加し、診断・治療方針検討、転科前症例につき合同で討議する。

### 4) 認知症カンファレンス・回診

基幹施設での研修中、週1回回診を行いカンファレンスに参加する。

### 5) 学会予行

受持ち症例の中で学問的に興味深い症例について、日本老年医学会地方会などで発表するに先立って、予行をおこない、指導医や診療科長の指導を受ける。さらに、自身が発表しない場合においても、講座で行われている研究について討論を行い、学識を深める。

### 6) 学生・卒後臨床研修医に対する指導

病棟で医学生・臨床研修医を指導する。後輩を指導することは、自分の知識を整理・確認することにつながる。指導方法の訓練ともなるため、指導医の指導を受けながら実践していく。

## 5. 学問的姿勢

高齢者の診療における専門知識、専門技能を実地で実践するために、最新の知識、技能、さらには、社会制度や介護機器の情報についても修得する。

さらに、自身の体験した症例を学会発表する姿勢や、まだ十分な科学的証拠の得られていない課題を見出し、リサーチに積極的に参画する姿勢を身につける。

## 6. 老年病専門医に必要な倫理性、社会性

多職種連携におけるリーダーシップを発揮できる能力を修得することは老年病専門医の重要な使命であり、エンドオブライフケアにも中心的に関わらねばならない。そのためには、高度な倫理性や社会性が要求される。在宅診療や療養病床で多くの経験を積むとともに、基幹施設で指導医と議論することにより、見識を深める。

## 7. 研修施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方

急性期、回復期、介護保険施設、在宅など、さまざまな環境で高齢者診療を経験し、その特質や意義を理解することは、本研修プログラムの重要な事項である。したがって、基幹施設に加えて、連携施設で研修することで、地域医療に貢献する。

## 8. 年次毎の研修計画

本プログラムでは専攻医が抱く専門医像や将来の希望に合わせて、各施設での研修期間や研修の順序を変更できる。また研修期間の途中であっても、研修プログラムの修了要件をみだす見込みがあれば、プログラムの変更は可能であるほか、提示したコース以外でも柔軟に対応できる。

研修に先立って、各専攻医のこれまでの研修(卒後臨床研修や内科専門研修)内容から、老年病学専門医カリキュラムに則った高齢者診療の経験の有無を判断し、標準コースに記載したように1年目の研修施設の選択判断の基準とする。この点は、在宅診療重点コースなど、他のコースを選択するときも同様である。

また、具体的な研修病院については、専攻医の希望と各年度の連携施設(15.研修プログラムの施設群を参照)の状況を考慮して、年度ごとに相談し決定する。

### 標準コース

○研修開始以前に老年病学専門医カリキュラムに則った高齢者診療の経験がないと思われる場合

1-3年目 基幹施設での研修

2-3年目 連携施設での研修を並行して実施

(4年目 基幹施設での研修:内科・老年病混合タイプの場合)

○研修開始以前に老年病学専門医カリキュラムに則った高齢者診療の経験があるとと思われる場合

1-2年目 基幹施設での研修

3年目 連携施設で研修

(4年目 基幹施設での研修:内科・老年病混合タイプの場合)

## 9. 専門研修の評価

### 1) 形成的評価

指導医およびローテーション先の上級医は、専攻医のカルテ記載の確認などによって、日常的なフィードバックを行うとともに、指導医は、専攻医が専門研修登録システムに登録したカリキュラムの経験、実践内容を経時的に評価する。少なくとも1年に1回、研修プログラム管理委員会は指導医のサポートと評価プロセスの進捗状況について追跡し、必要に応じて指導医と連携し、評価の遅延がないように促す。また、達成度が低い項目がある場合には、その項目についてより多く研修できるように今後の研修計画を調整する。

## 2) 総括的評価(全プログラム共通)

13. 修了判定を参照。

## 10. 専門研修プログラム管理委員会

本プログラムを履修する専攻医の研修について責任を持って管理するプログラム管理委員会を基幹施に設置し、老年医学に関わる診療科のリハビリテーション科 部長 江崎貞治がその委員長の責を担う。

## 11. 専攻医の就業環境

労働基準法や医療法を順守し、専攻医の心身の健康維持のための環境を整備する。

## 12. 研修プログラムの改善方法

可能な限り年に1回、少なくともプログラムの終了時点において、現行プログラムに関するアンケート調査を行い、専攻医の満足度と改善点に関する意見を収集し、その集計結果に基づき、研修プログラム管理委員会は、プログラムや指導医、あるいは研修施設群の研修環境の改善に役立てる。

## 13. 修了判定(全プログラム共通)

以下について、研修プログラム管理委員会が確認したうえで、日本老年医学会専門医制度委員会にて審査を行い、修了を判定する。

- 1) 老年病専門医カリキュラム必須項目すべてと、必須項目以外の項目の7割以上について修得したか(研修レポートと面接試験で評価)
- 2) 研修期間中に、何等かの教育活動(学生対象の講義、院内セミナーや市民対象の講演を含む)を経験したか
- 3) 学術活動として、学会発表もしくは論文発表を少なくとも1件は達成させたか

## 14. 専攻医が専門研修プログラムの修了に向けて行うべきこと(全プログラム共通)

専攻医は、老年病専門医認定申請年度の12月末までにプログラム管理委員会を通して日本老年医学会の専門医制度委員会まで様式〇〇(未定:研修レポート、学会発表数、学術論文発表数、教育的活動についての書類)を送付すること。その後、専攻医は、専門医制度委員会により、研修レポートおよび学会発表、学術論文発表、教育的活動についての書類審査を受け、専門医制度委員会により1-3月に開催される面接試験の受験資格が与えられる。

## 15. 研修プログラムの施設群

以下の施設で研修施設群を構成する。

- 基幹施設： 総合大雄会病院
- 連携施設  
・名古屋大学医学部附属病院

## 16. 専攻医の受け入れ数

総合大雄会病院老年専門研修プログラムには、3名の指導医がおり、プログラムとして1年で最大3名(定員上限)の専攻医を新規に受け入れる(指導医1名あたり原則1名/年の専攻医を新規で受け入れる。3または4年の専門研修期間として1名の指導医あたり3-4名程度)。

## 17. 研修の休止・中断、プログラム移動、プログラム外研修の条件

- 1) 疾病あるいは妊娠・出産、産前後に伴う研修期間の休止については、プログラム修了要件を満たしていれば、休職期間が6か月以内であれば、研修期間を延長する必要はないものとする。これを超える期間の休止の場合は、研修期間の延長が必要である。
- 2) 研修中の居住地の移動、その他の事情により、本プログラムでの研修続行が困難になった場合は、研修プログラムを変更することにより、研修を原則可とする。その際、研修手帳を活用することにより、これまでの研修内容が可視化され、移動先の新しいプログラムにおいても、移動後に必要とされる研修内容が明確にする。

## 18. 専門研修指導医(全プログラム共通)

日本老年医学会が定める専門研修指導医の要件は以下の通りである。

### 【必須要件】

- 1) 専門医を育成するための、高齢者の医療に関する豊富な学識と経験を有すること。
- 2) 原則として、申請時において専門医資格を1回以上更新していること。
- 3) 原則として、専門医取得後に老年病学に関する研究論文(原著・総説・症例報告)を1編以上発表していること。

## 19. 専門研修登録システム(全プログラム共通)

専攻医は別添えの専門研修登録システムに、担当した症例を登録し、加えて、老年病専門医カリキュラムに記載されている事項のなかで、実践し修得した項をチェック



する。指導医は記入された別添えの専門研修登録システムを定期的に確認し、フィードバックを専攻医に与える。

## **20. 専攻医の採用方法**

プログラムを提示し、それに応募する専攻医を、研修プログラム管理委員会において、面接などにより選考する。